詩篇22－24篇「しもべ・羊飼い・栄光の王」

1A 苦しむ僕 22
　1B 助けを呼ぶ嘆き 1－21
　　1C 遺棄 1－10
　　　1D 神から 1－5
　　　2D 人々から 6－10
　　2C 断罪 11－21
　2B 全世界に及ぶ賛美 23－31
　　1C 悩み者への答え 23－26
　　2C とこしえの御国 27－31
2A 導く羊飼い 23
　1B 満たす方 1－2
　2B 導く方 3－4
　3B もてなす方 5－6
3A 栄光の王 24
　1B 全土の主 1－2
　2B 礼拝における清さ 3－6
　3B 主の凱旋 7－10

本文

詩篇 22 篇からお読みします。今日は、三章分しか読みませんが、ここは三つ巴のような詩篇です。メシヤ詩篇と呼ばれる、キリストの働きを預言しているところです。22 篇は、苦難を受けているメシヤ、23 篇は羊飼いなるメシヤです。これは今、聖霊によって私たちに働きかけておられるキリストを示しています。そして 24 篇は、再臨のメシヤです。しかし、ダビデがこれらを預言する時に、自分と完全に切り離して預言しているのではありません。彼は多くの苦しみを経ました。そこから救われました。そして、彼自身羊飼いでした。そして、彼自身、王でありました。彼の生涯における祈りや賛美から、御霊に導かれてキリストを預言しています。

1A 苦しむ僕 22
1B 助けを呼ぶ嘆き 1－21
1C 遺棄 1－10
1D 神から 1－5
22 指揮者のために。「暁の雌鹿」の調べに合わせて。ダビデの賛歌

私たちはこれまで、ダビデがサウルの手から救われ、アブシャロムによるクーデターでエルサレ

ムを追われる背景、また国々と戦う彼の姿から、苦しみの中にいる時の祈りを読んできました。ここも同じように、神に対して嘆いている祈りであります。ところが、二つの面でダビデの生涯に当てはまらないものがあります。一つは、ダビデは生きたままで救われないということです。彼は敵に取り囲まれて、死んでいく自分の姿を描いています。しかし彼は、長寿を全うしました。もう一つは、彼が犯罪人として死んでいくということです。その処刑を自分が受けているのを描いています。この二つが、彼の生涯のどこにも合致しないのです。しかし、詩篇 22 篇の記述の数多くの部分が、新約聖書の中に引用されています。そうです、主イエス・キリストの十字架であります。

「暁の雌鹿の調べ」とありますが、それがどんな調べなのかは分かりません。けれども、興味深いことに、他の動物がこの詩篇には登場します。雄牛、獅子、犬、野牛です。これらに取り囲まれ、食い殺される自分の姿を描いています。それで、ダビデは自分のことを雌鹿に例えているのかもしれません。

22:1 わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。22:2 わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。

最も深い闇の中か発している言葉です。神ご自身から見捨てられている、遠くに離れて救ってくださらないという言葉から始まっています。しかし、それは本人と神との関わりが消えたのではありません、「わが神、わが神」と神を自分の個人的な関係のある方として呼び求めています。この嘆きが 21 節の前半まで続きます。

この言葉は、イエス様が十字架上で発せられたものでした。マルコ 15 章 33-34 節を読みます。「さて、十二時になったとき、全地が暗くなって、午後三時まで続いた。そして、三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。」イエス様が十字架につけられたのは、午前 9 時です。主はとてつもない痛みと苦しみの中にいましたが、その時に罵っている祭司長や群衆に対して、「父よ。彼らをお赦しください。」と祈られました。また、共に十字架に付けられている強盗には、「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」とも言われました。このように、イエス様は人々に気にかけておられる余裕がありました。それも、すべて天におられる父の御顔を仰ぎ見ることができたからです。

しかし、今読みましたように、正午になった時に全地が暗くなりました。詩篇 22 篇 2 節にもあるように、昼に夜がやって来たのです。2 節だけ読むと、昼から夜になるまで長いこと祈っていたダビデのように見えますが、正午になったらすぐに夜になったのです。その三時間の間の出来事でありました。ここで主は絶望を味わわれます。主が一瞬たりとも離れることなく、拠り頼んでおられた父なる神から遺棄されたのです。これほど、恐ろしいことはありません。これは肉体の痛みや死以

上の恐ろしさです。それは、御父という希望を失った瞬間です。

イエスは、初めから父なる神と共におられた方でした。永遠の昔から父と子の関係がありました。「父のふところにおられるひとり子の神」と使徒ヨハネは証言しています（1:18）。私たちにとって、罪の中に生きていて、この方を知らなかったので、この方を知ったことの喜びは新鮮ですが、イエス様にとっては、この方を知らなかったということが永遠の昔からなかったのです。しかし今、全世界の罪がイエス様の上に置かれました。罪は神から私たちを引き離します。その罪を取り除くため、御父はご自分の愛するひとり子に罪を置かれたことによって、イエス様は御父から引き離されたのです。ですから、いつも「父」と呼ばれていたイエス様は、十字架上では「わが神、わが神」と、丹あるエロヒム、神としてこの方を呼ばれたのです。その関係が引き離された衝撃があるのです。

したがって、私たちが希望を失いそうになるとき、イエス様を思い出してください。神から自分が遠く離れているという孤独を味わっている時に、主はすでに孤独を味わっておられたということを思い出すことは必要です。

22:3 けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。22:4 私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました。22:5 彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。

「けれども」という言葉を使って、ダビデはこれでもかと言わんばかりに、神への賛美に対する希望を捨てていません。彼は、自分が死ねば神をほめたたえることがなくなるではないか、という訴えをしたことがあります。「死にあっては、あなたを覚えることはありません。よみにあっては、だれが、あなたをほめたたえるでしょう。(6:5)」だから死から救い出してほしいと願っているのです。けれども、ダビデはキリストを預言しています。祈りは聞かれるのですが、肉体の死を免れることによって聞かれることはありませんでした。21 節で、敵に取り囲まれながら死んでいく最後の叫びを耳にします。しかし祈りは聞かれます。22 節以降に、よみがえったキリストの姿を見るのです。

「あなたは聖であられ」るという言葉、これが神から見捨てられている理由となっています。神が罪から離れ、一切の汚れも欠陥もない方であります。ゆえに、罪の供え物となられたキリストを受け入れることはできなかったのです。そしてダビデは、イスラエルの中にあった主との関係を思い起こします。イスラエルには賛美があり、彼らが主に信頼して、助け出してくださったからです。ところが今、その先祖たちにあった関係でさえが切り離されています。

2D 人々から ６－１０

22:6 しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。22:7 私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。22:8「主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」

御父から見捨てられ、そしてイスラエルの民の持っている神との信頼関係からも見放され、そして今、その民自身からも蔑みを受けていることを嘆いています。初めに、自分は人間以下だ、「虫けら」だと言っています。ちょうど、イスラエルの民がマナをさらに一日保存しようとしたところ、腐ってうじがわいてきたという時の、あの蛆虫に自分を喩えています。そして非常に興味深いことに、この同じヘブル語が、多くの場合「緋色の撚り糸」として訳されていることです。幕屋で使われる、あの緋色の撚糸です。それは、緋色の撚糸となる染料をが、この虫から色素を取っているからです。イザヤは、私たちの罪が緋色のように赤くても、雪のように主がしてくださると言われました。踏みにじみられるべき罪、虫けらと同じように忌み嫌わなければならないものとして、緋色があります。

しかし、その緋色を神の住まわれる幕屋の中にふんだんに使っています。それはなぜか？キリストによる罪の贖いを表しているからです。この方が流された血潮こそが、忌み嫌うべき罪を洗い流してくださることを示していました。したがって、イエス様は虫けらのように卑しめられました。しかし、その同じ虫けらが神の栄光を表していたように、むごたらしい十字架は神の栄光を示していたのです（ヨハネ 12:28,32-33）。

そして、ご自分の民の罵り、あざける言葉ですが、いかがでしょうか、ダビデがこれを発したのは紀元前千年ぐらいであります。千年後に、まったく同じ言葉を見事に祭司長たちや民が発したのです。「同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけって言った。「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王さまなら、今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ。』と言っているのだから。」（マタイ 27:41-43）」こんな人のセリフまで全く同じことをダビデの口を通して、聖霊が前もって語らせてくださったのです。

これまでもダビデは、心の直ぐな人に対する高ぶる者の口について話していました。主に素直に拠り頼むことついて、神はいないと心の中で思っている者たちが嘲ります。イエス様も、したがって父なる神に拠り頼んでいることで人々に知れ渡っていたのでしょう。そして神に愛されていた、お気に入りだったということも知られていました。私たちも神を誇りますが、いざという時に、なんら救いを見ないような時、それであればその神に救ってもらったらよいという嘲りを、人に言われなくても心の中で聞いてしまうのではないでしょうか？主イエスがその苦しみを受けておられました。

22:9 しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に拠り頼ませた方。22:10 生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。

イスラエルの賛美からも引き離された著者は、今、もっと初めにあった母の胎に、神への拠り所を見ます。自分の命が与えられた、それはもっぱら神に拠ることをダビデは知っていました（詩篇 139:13-16）。胎児である自分を、その骨や内臓を造られたのも神であり、その時から神に知られ

ており、神の書物には自分の作られた造られた日々が記されていると言っています。自分の命を取りたいと願っている衝動に駆られた人、その命は神によってたくさんの思いが込められていることを忘れないでください。

そしてダビデはここでも、キリストについても話しているのかもしれません。キリストご自身は母の胎から神にゆだねられた方です。ガブリエルはマリヤに、聖霊によってあなたは身ごもると言いました。神のことばであられるキリストが、聖霊によって肉体を持ったのです。

2C 断罪 11－21

22:11 どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。22:12 数多い雄牛が、私を取り囲み、バシャンの強いものが、私を囲みました。22:13 彼らは私に向かって、その口を開きました。引き裂き、ほえたける獅子のように。

自分を取り囲んでいる者たちを、「数多い雄牛」に喩えています。バシャンとは今のゴラン高原で、ガリラヤ湖の北西の部分ですが、遊牧に適しているところです。ここの雄牛は、イエス様を捕えて裁判を行い、死刑に定め、それからローマ総督ピラトに引き渡し、群衆を扇動して、十字架刑に追いやったユダヤ人指導者のことを指しています。その牛が口を開いています。イエスに対する数多くの暴言がそれです。

そして、この牛が獅子のようにほえていると、獅子に食い殺されていると表現しています。獅子といえば、使徒ペテロが、悪魔を獅子として喩えていました。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩きまわっています。」（1ペテロ 5:8）」イスカリオのユダがイエスを裏切る時に、サタンが彼に入ったとヨハネは記していますが、この闇の力の黒幕は悪魔自身でした。

22:14 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。22:15 私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついています。あなたは私を死のちりの上に置かれます。

この苦しみ方、死に方は、ユダヤ人に与えられている死刑方法には一切、合致しないものであります。ユダヤ人は石打ちによって殺すことを神に命じられていますが、全然合致しません。ここは、まさに十字架刑の姿です。「水のように注ぎ出され」るというのは、極度の発汗です。そして、「私の骨々はみな、はずれました。」というのは、十字架に付けられるときに、木が穴に入った時の振動の衝撃で、関節が外れる様を表しています。

「私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。」というのは、心臓が内部破裂状態になっていくさまを示しています。後に、ローマ兵士が槍で脇腹を刺し通したら、水と血が出てきたのはそ

のためです。そして、「私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついています。」というのは、極度の脱水症状を指しています。

「私を死のちりの上に置かれます」という表現ですが、これは私を殺しました、ということなのですが、「ちり」という言葉を使っています。神が人を土の塵から造られ、遺体は土に戻るのですが、しかし、それ以上の意味合いもあります。神がアダムに呪いとして次のことを言われました。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。（創世 3:19）」土に帰るのは、罪を犯した後の呪いの一環として描かれているのです。したがって、イエス様はその呪いを身代わりに受けてくださった、ということであります。

22:16 犬どもが私を取り巻き、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。
22:17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。

「犬ども」が出てきました。聖書では多くの場合、犬が非常にさげすむ対象として出てきます。ごみに群がる、あのイメージですね。ここでは、異邦人のこと、つまりローマ兵のことを話しています。彼らがイエスを取り巻き、この方にいばらの冠を載せ、葦を持たせて、「ユダヤ人の王さま、ばんざい。」とからかって言いました。そしてこの彼らが、十字架刑を執行しました。手と足に釘を打ちつけ、杭の上にイエスをはりつけたのです。それで関節が外れ、骨々が外れているのをイエス様は体中で感じておられます。そして、そのご自分をローマ兵が眺めています。

22:18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。

私たちは福音書の中でローマ兵がこのことを行なったのを知っています。使徒ヨハネは、そのいきさつを詳しく説明しています。「さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。そこで彼らは互いに言った。「それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」それは、「彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた。」という聖書が成就するためであった。（ヨハネ 19:23-24）」「下着」というのは肌着のことです。上に来ていた着物は四分しましたが、この肌着は縫い目がないのでくじ引きにしました。ヨハネは弟子たちの中で、唯一、すぐそばで母マリヤといっしょにイエスの十字架を目撃していました。そしてヨハネは、まさに 18 節に書いてあることが実現しているではないか、という驚きをもってこの言葉を書いたものと思われます。

22:19 主よ。あなたは、遠く離れないでください。私の力よ、急いで私を助けてください。22:20 私のたましいを、剣から救い出してください。私のいのちを、犬の手から。22:21a 私を救ってください。獅子の口から、野牛の角から。

「遠くに離れないでください」という叫びが続きます。1 節、11 節、そして 19 節です。犬の手はローマ、そして獅子の口は悪魔、そして野牛の角とありますが、その角は針のようにとがっているのだそうです。はたして、この祈りは聞かれたのでしょうか、次を読みましょう。

22:21b あなたは私に答えてくださいます。

答えてくださいました。この祈りは、イエスが「わが神、わが神、なぜお見捨てになられたのですか。」と祈られた後に、次第に言葉の中に見出されるものです。主は、「わたしは渇く」と言われ、ローマ兵が酸いぶどう酒の入った海綿を近づけ、その時に「完了した」と言われました(ヨハネ 19:30)。そして、「父よ。わが霊をあなたにゆだねます。(ルカ 23:47)」と言われて、息を引き取りました。単なる神ではなく、再び父よ、と呼びかけています。ここにはすでに勝利の思いが込められています。それは祈りが聞かれたことを確信しておられたからです。この様子をヘブル書の著者が記しています。「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。(ヘブル 5:7)」その祈りとは、死を免れる祈りではなく、死んでも生き返ることによって、死から救われることを意味していました。

2B 全世界に及ぶ賛美 23－31

1C 悩み者への答え 23－26

22:22 私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。

今、ここはダビデが話しているのあれば、すんなりと読めます。彼は神の箱をエルサレムに運んでいる時、民に混じって主を高らかに賛美しました。王服を脱いで、喜んで踊りながら賛美していました。けれども、この箇所はキリストご自身が語っているものとして、ヘブル書の著者が引用しているのです。「聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」(ヘブル 2:11-12)」私たちの主イエスが、ご自身を私たちの兄弟と呼ばれて、共に父なる神をほめたたえている箇所であります。主は復活された後に、私たちの兄弟になってくださり、ローマ 8 章によると「長子」になっておられます(29 節)。

主であられる方なのに、どうして兄弟とご自身を呼ばれるのでしょうか?イエス様は十字架につけられる前に、弟子たちに愛の限りを尽くして愛されました。そこで語られたのが、この言葉です。「ヨハネ 16:26-27 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。それはあなたがたがわたしを愛し、また、わたしを神から出て来た者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられるからです。」イエスの御名によって、父なる神に直接、近づくことができるようになったのだよ、ということです。つまり、イエス様は、ご自身が父なる神と持っている子としての特権を、お裾分けのようにして養子縁組で

ご自身を信じる者にも与えようとしておられるのです。

それをご自身の復活によって、成し遂げられました。イエス様は復活された後で、園の墓の敷地でマグダラのマリヤに会われました。そしてこう言われました。「ヨハネ 20:17 わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」神はご自身の父でしたが、その親密な関係の中に弟子たちをも招き入れて、それで彼らの直接の父にもなりました。そこで彼らと一つになられて、弟子たちのことを「兄弟」と呼ばれています。なんと、こんな近しい関係を私たちは神と持つことができるのです！

22:23 主を恐れる人々よ。主を賛美せよ。ヤコブのすべてのすえよ。主をあがめよ。イスラエルのすべてのすえよ。主の前におののけ。22:24 まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。

ヤコブのすえ、すなわちイスラエル人たちに主を賛美し、あがめ、おののくことを呼びかけています。けれどもその前に、「主を恐れる人々よ」と言っています。ここが大事ですね、イスラエル人だからといって、すべての人が主を恐れているのではないからです。主を恐れているイスラエル人とは、イエスがよみがえられ、確かにキリストであり、神の御子であることを信じたイスラエル人のことです。私たちは初代教会にて、イエスの復活の証しはユダヤ人たちの間から始まったことを知っています。屋上の間で祈っているところで、聖霊が降ってこられて、彼らが聖霊で満たされました。エルサレムで教会が誕生し、ステパノの殉教まではエルサレムで、ユダヤ人たちの間の証しでありました。

そして、「悩む者」とはダビデ自身のこと、けれどもキリストを予見しているので、キリストご自身が死からの救いを証言しています。叫び求めた時に、聞いてくださったのです。

22:25 大会衆の中での私の賛美はあなたから出たものです。私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。22:26 悩む者は、食べて、満ち足り、主を尋ね求める人々は、主を賛美しましょう。あなたがたの心が、いつまでも生きるように。

ダビデは、さらに友に賛美する仲間を拡げています。「大会衆の中で」とあります。そして、次の節 27 節を見ると、この大会衆の構成員を見ることができます。国々の民の中から、主を恐れる者たちが選びだされて、集まっているのです。ダビデはさらに、復活されたキリストがユダや人の間だけでなく、異邦人の間でもあがめられることを預言しているのです。

そしてご自身が悩まれたように、今、悩む者に対して、食べて満ち足りることを約束しておられます。この食べて満ち足りるというのは、物質的な貧困も含まれるかもしれませんが、それ以上に霊的な貧困から救われることです。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからで

す。」というイエス様の言葉のとおりです。このことによって、私たちの心が生かされるのです。

2C とこしえの御国 27－31

ですから、主が苦しみを受けられ、そこでの祈りはよみがえりによって聞かれて、それからユダヤ人の間で主を信じ、次に異邦人の間で主を信じるようになっていき、そこで御名がほめたたえられるようになっていきました。そして 27 節以降で、ダビデは私たちの時代を越えた将来の希望を見通しています。

22:27 地の果て果てもみな、思い起こし、主に帰って来るでしょう。また、国々の民もみな、あなたの御前で伏し拝みましょう。

預言者イザヤは、主の救いが及ぶのを「島々」という言葉で、地の果てまで、全世界的なものであることを予見しました。「51:5 わたしの義は近い。わたしの救いはすでに出ている。わたしの腕は国々の民をさばく。島々はわたしを待ち望み、わたしの腕に拠り頼む。」今、私たちは教会によって、御霊の導きによって、全世界に福音が届けられています。そして主が戻ってこられます。全世界は、神とキリストに反抗して戦いを挑みますが、ことごとく滅ぼされます。しかし、すべての者が反抗するのではありません。主が戻ってこられて王座に着かれた時に、国々を集めて、羊をやぎから選り分けるように分けて、ご自分を信じている者たちを御国に招き入れます。

そして、彼らはこれまで自分たちの国で拝まれている神々に仕えていたのですが、そこから立ち返り、すべての人を造られた神、そしてイスラエルを選ばれた神を自分たちの王として、エルサレムにおられるイエスを礼拝するために集まってきます。それがここに書いてある幻です。ゼカリヤは、このように預言しました。「14:16 エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。」

22:28 まことに、王権は主のもの。主は、国々を統べ治めておられる。22:29 地の裕福な者もみな、食べて、伏し拝み、ちりに下る者もみな、主の御前に、ひれ伏す。おのれのいのちを保つことのできない人も。

王権はすべての者に及びます。貧しい者、悩む者たちは初めに主によって満たされましたが、キリストが全地の王となられた時は、どんな者でもこの方にひれ伏さなければいけません。ですから、ここで裕福な者もひれ伏さなければいけないことが書かれています。今の時代において、富んだ者たちが高慢になり、神に拠り頼むことを怠りますが、主はそうした者たちをも従わせるのです。

そして、こうした者たちは長生きしません。イザヤ書には、百歳までしか生きない者は、生まれてきてすぐに死んでしまった赤ん坊と同じようなものであることが書かれています。それだけ、地上の神の国では人々が長く生きるということです。けれども、長生きせず死んでいく人も、キリストの

王権にはひれ伏さなければいけないのです。「2:11 すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」とあります。

22:30 子孫たちも主に仕え、主のことが、次の世代に語り告げられよう。22:31 彼らは来て、主のなされた義を、生まれてくる民に告げ知らせよう。

神の国において、まだ復活の体を持っていない人々がいます。先ほど話したように、羊として選り分けられた国々の民は今の体をもって御国の中に入りました。したがって、子を生みます。そこで、主のなされた義を必ず伝えていきます。

そしてこれは、今の時代の私たちにも当てはめることができます。キリストが神から見捨てられるという苦しみ、そしてご自分の民から拒まれるという苦しみを経て、よみがえり、兄弟として共に神を賛美し、最後は王となられる、この福音を私たちは語り告げ、今にまで至るのです。今、悩んでいる者は、キリストが悩まれたことを思い出すのです。そして、この方にあって祈りが聞かれることを知ってください。

2A 導く羊飼い 23

そして、次に主が今、行なってくださっている働きに移ります。22 篇も、現代、そして将来に至るまでの神のご計画を示していますが、二千年前にキリストが苦しまれたというところが起点となっています。けれども 23 篇は、主が今、私たちにどのように関わってくださっているのか、その働きに着目しています。

1B 満たす方 1－2

23 ダビデの賛歌 23:1 主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。23:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

午前礼拝の説教を思い出してください。羊飼いとしての主の関わりを、じっくりと見ていきました。イエスはご自身を良い羊飼いと言われましたが、ヘブル書の著者も、「永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエス」と呼んでいます（13:20）。同じようにペテロも、イエスを大牧者と呼びました。長老たちに対して、神の羊の群れを牧しなさい、と勧めた後にそう言いました（1ペテロ5:1-4）。教会に牧者が立てられていますが、牧者たちも羊であり、イエスが全ての者の牧者であられるからです。

午前礼拝で言及しなかったことで、羊飼いが羊を導くときの方法について話します。「伴われます」とあります。ここのヘブル語は、寄り添いながら優しく導く、導きであります。急かしたり、強いたりするものではありません。それをすれば、羊飼いと羊の信頼関係は壊れます。むしろ、羊飼いが絶え間なく世話をし、羊が羊飼いを信頼することを学び、それで、名を呼ぶだけで羊飼いの声を聞

きわけて付いていくような、そういった伴いであります。

私たちは、西日暮里バイブルスタディで聖霊の学びをしていますが、イエスが弟子たちに聖霊の約束を与えられる時に、この方を「もうひとりの助け主」と呼ばれました。その意味は、「そばに来て、援助するように呼ばれた者」という意味があります。導くときに、寄り添って助けるような形で導かれるのです。したがって、イエス様は今、聖霊によって私たちを導かれています。

2B 導く方 3－4

23:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

主が共におられるその義の小路は、死を予期するようなことが起こっても、それでも恐れから守られた状態です。そして、自分たちが右に左にそれていきそうになる時に、主はむちと杖で守ってくださいます。これは痛いかもしれませんが、危険と罠から守ってくれていることを知り、慰めになるのです。

3B もてなす方 5－6

23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。23:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

私は、ここでまだ神の恵みについて分かっていないな、と感じました。神の恵みは、私たちを、神ご自身からもてなしを受けた客の位にまで導くのです。そしてそれが、敵前でそうだということも習いました。敵に囲まれていても、ダビデは主の中でこのような恵みを受ける方法を知っていました。

そして彼の情熱は、今もそして死んでからも続く、主の家に住むことでありました。これも、イエス様ご自身が語られていたものです。十二歳になられて、両親に連れられて過越の祭りに伴われましたが、両親が帰宅の旅に出かけていると、なんとイエスはいませんでした。そして探しながらエルサレムまで来たら、なんと神殿の境内で学者たちと議論しています。マリヤが、「何をしているのですか。」とたしなめると、「わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。(ルカ 2:49)」と言われました。父の家、神の住まいにいることが、イエスにとってのライフワーク、永遠の務めであられるのです。

ですから、私たちがどこに焦点を合わせるべきなのかは、自ずと分かってきます。心を一つにすることです、この方の家に住むことを第一にすることです。他のいろいろな雑用や、いろいろな情報が入ってきます。それ自体は決して悪いものではないにしても、この営みから引き離す要因となっ

てくるのです。

3A 栄光の王 24

そして 24 篇ですが、栄光の王が戦いの後にエルサレムの門に入ってくる、そのお迎えをするための詩篇になっています。この背景は、ダビデが神の箱をエルサレムに運んでくることがあるとされていますが、キリストがろばの子に乗ってオリーブ山からエルサレムに入られた時のこと、そして、それ以上にキリストが再びオリーブ山に来られて、それからエルサレムに入られる再臨の出来事を預言したものです。

1B 全土の主 1－2

24 ダビデの賛歌 24:1 地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。
24:2 まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。

今、ダビデは主がどのような方であるかを、民に宣言しています。それは、イスラエル人の中だけの神ではなく、全地の主だということです。2 節の地の創造について、「あれ順番が逆じゃないの？」と思われるかもしれません。地球の上に海があるのであり、海の上に地の基があるのではない」と思われるでしょう。しかし、創世記１章で、三日目に、海が分かれて、乾いたところを地と名づけ、水のところを海と名づけた、とあります。つまりすべてが水であったところに地が造られたという順番なのです。実に、地球の水と地の割合は「七　対　三」と言われていますから、それは正しいのです。

ここでは、言い換えれば、「私たちの主は、クリスチャンたちだけの主ではなく、全世界の主、どこも漏れることなく、遍くおられる方、そして、その主権者である。」ということであります。これから、栄光の主が門に入られます。この方は、全世界に対して王の王、主の主として現われるのです。それで、すべての者の主であることを示すために、創造主であることを示しているのです。ゼカリヤ書に、世界の国々がエルサレムを踏みつけていく姿が描かれています。主がそれらの国々を裁かれるために戻ってこられるのですが、こう言われました。「すべての肉なる者よ。主の前で静まれ。主が立ち上がって、その聖なる住まいから来られるからだ。(2:13)」

2B 礼拝における清さ 3－6

24:3 だれが、主の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。24:4 手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。24:5 その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける。

全地の主であられる方が、ご自分の住まいとしてシオンを選ばれています。エルサレムにあるその山が、聖なる神殿のあるところです。ですから、主は全てのものを隅々まで造られた方ですが、すべての人がそこに入れる訳ではないということです。大事なのは、「聖なる所」とあります。シナ

イ山においても、主は聖なる方として現われ、ふもとには境がありました。そこから入って登ろうとする者は打たれて、殺されてしまうからです。そのまま入ることはできないのです。

５節には、その中に行くことができるのは、「その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける」者であるとあります。この言葉は、キリストにあって、この方を信じる者に実現します。ガラテヤ書２章３節に、「信仰による人々が、アブラハムとともに、祝福を受けるのです。」とあります。そして、神が私たちを救い、義と認められるようにするのは、ローマ１章 16-17 節に書いてあります。福音が、信じる者に救いを与える神の力であり、福音のうちに神の義が啓示されている、とあります。

そのように祝福を受けていて、救いの神から義を受けている者は、戻りますが、4 節、「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。」という特徴を持っているのです。これは、詩篇 15 篇でダビデがすでに、主の聖なる山に住むことのできる者として、この特徴を挙げていました。手が清い、というのは自分の行動が清められているということです。そして心が清らかなのは、その態度のことですね。ですから態度も行動も清い、ということであります。そして、魂が虚しいことに向かないというのは、他の神々のところに行かないということです。エペソ書 4 章で学びました、神を知らない異邦人は思いが虚しくなり、道徳的にも無感覚になって、恥ずべきことをするとありました。そして、欺き誓わないというのは、その言動に裏表がないということです。主の前に自分を裸にすることができ、そして人の前でも隠し立てをしない、ということです。

24:6 これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである。セラ

「これこそ」と強調しています。なぜなら、たとえイスラエルの末裔であっても、このように生きていない者はイスラエルと呼ばれる資格がないということです。ヤコブが模範となっています。5 節の説明を見て、自分は駄目だと思ったのではないでしょうか？そこに書かれているのは、完璧な人ではなく、ヤコブのように一途に主を求める人であります。欠陥があっても、その欠けを主の前に隠すことのない人であります。「御顔を慕い求める」とありますが、ヤコブは御使いと格闘しても、そこで太ももの関節を外されても、それでも主の顔を見てしまうほどにこの方を求めました。

3B 主の凱旋 ７－１０

24:7 門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。24:8 栄光の王とは、だれか。強く、力ある主。戦いに力ある主。24:9 門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。24:10 その栄光の王とはだれか。万軍の主。これぞ、栄光の王。セラ

これは賛歌であり、ゆえに呼びかけがあって、それに呼応してレビ人の賛美奉仕者が歌うという

形を取っていると思われます。7 節と 9 節で、呼びかけをし、8 節と 10 節で呼応しています。

門というのは、エルサレムの門です。当時の町の門は、城壁の中に部屋がたくさんある、行政を行なうところでした。そして、神殿の敷地に入る門には、レビ人による門番がいました。したがって、ここで「おまえたちのかしらを上げよ」というのは、そうしたレビ人や頭たちのあたまのことです。今、栄光の主が入ってこられるのだ、ということです。栄光の主は、棕櫚の聖日、ろばの子に乗られたイエスが入られましたが、しかし民の心備えはできていませんでした。手が清く、心が清らかで、欺き誓わない者が聖なる所にいる条件でしたが、イエスが入られた時は両替台があり、牛や羊、鳩などが売られており、宮清めをしなければいけませんでした。

このことが起こるのは、再臨の時です。エルサレムが、世界の国々から攻められます。「ゼカリヤ 12:2-3 見よ。わたしはエルサレムを、その回りのすべての国々の民をよろめかす杯とする。ユダについてもそうなる。エルサレムの包囲されるときに。その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。すべてそれをかつぐ者は、ひどく傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来よう。」そして主が戦われます。だから、ここで栄光の主は、力強く、戦われる主であるとあるのです。「ゼカリヤ 14:3-4 主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。」

そして天変地異が起こった後に、エルサレムのところが高くなり、周りが低地となり、エルサレムが世界において最も高い山となります。そこに主が凱旋入城されます。神殿には、東の門から入られます。「エゼキエル 43:1-5 彼は私を東向きの門に連れて行った。すると、イスラエルの神の栄光が東のほうから現われた。その音は大水のとどろきのようであって、地はその栄光で輝いた。私が見た幻の様子は、私がかつてこの町を滅ぼすために来たときに見た幻のようであり、またその幻は、かつて私がケバル川のほとりで見た幻のようでもあった。それで、私はひれ伏した。主の栄光が東向きの門を通って宮にはいって来た。霊は私を引き上げ、私を内庭に連れて行った。なんと、主の栄光は神殿に満ちていた。」

なんというすばらしい約束でしょうか！イエス様が全地の王として戻ってこられます。そして、神に反抗する高ぶる者たちを滅ぼしてくださいます。そしてこの地をすべて刷新してくださり、イエスだけが王であり主であることを、全世界が認めます。国々がそこに入ってきて、この方を王として礼拝するのです。そこで私たちは、知らないといけません。この山に入ることのできるのは、手が清められ、心が清らかで、虚しいことに魂を向けず、欺き誓わない人です。私たちがお会いする方は栄光の主であり、聖なる神です。